

第8章 複文

この章では複文を扱う。この章の構成は以下のとおりである。

- 1 複文の分類
- 2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分として現れる場合
 - 2.1 名詞節が前置詞句を構成する場合
 - 2.2 名詞節が補語として機能する場合
 - 2.3 名詞節が文の述部である場合
 - 2.4 名詞節が名詞句内の修飾成分として機能する場合
- 3 文が名詞節化されず直接名詞句内の修飾成分となる場合
- 4 従属文 1（完全な文として現れるもの）
 - 4.1 従属文が主文の主語に相当する場合
 - 4.2 従属文が主文の目的語に相当する場合
 - 4.3 発話・伝達を表す自動詞と共起する従属文
 - 4.4 第4節のまとめ
- 5 従属文 2（完全な文としては現れないもの）
 - 5.1 主文の主語と従属文の主語が同一指示である場合
 - 5.2 主文の目的語と従属文の主語または目的語が同一指示である場合
 - 5.3 主文の動作の受け手を表す要素と従属文の主語が同一指示である場合
 - 5.4 第5節のまとめ
- 6 従属文 3（接続詞を伴うもの）

1 複文の分類

本稿では、二つの述部が何らかの形で一つの統語的まとまりを形成している場合、その全体を複文と呼ぶ。複文には次のようなものがある。

[1]名詞節が文の成分または文の構成要素（名詞句または前置詞句）の成分である場合（第2節で扱う。）

[2]名詞節形成詞を伴わない文が名詞句内の修飾成分となる場合（第3節で扱う。）

[3]従属文 1つの文が名詞節を形成せず、全体でもう一方の文の成分となる場合。

従属文は接続詞を伴わない場合と伴う場合がある。また、接続詞を伴わない従属文は完全な文として現れる場合と、特定の補語と共起しない不完全な形で現れる場合がある。（非常におおまかにいうと、前者は英語の *that* 節に、後者は不定詞に相当するような機能を持つ。）第4節で前者を、第5節で後者を扱う。また、接続詞を伴う従属文については第6節で扱う

2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合

第5章8で述べたように、名詞節形成詞 *lók, adè* は単文に先行し、名詞節を形成する。

名詞節は一般の名詞句と同様、次の統語的機能を持つ。

- [1] 前置詞句の構成要素としての機能
 - [2] 文の補語としての機能
 - [3] 文の述部としての機能
 - [4] 名詞句内の修飾成分としての機能
- [1]-[4]の機能について以下に述べる。

2.1 名詞節が前置詞句を構成する場合

名詞節形成詞 *adè* を含む名詞節は前置詞に後続し、前置詞句を構成する¹。以下に例を示す。以下の例文では名詞節を [] に入れて示す。

- (1) *nya tedu pang' [adè ku=beli]*
 3 stay at NOM 1SG.LOW.AFFIX=buy
 「彼は私が買ったもの（家など）に住んでいる。」
- (2) *nya datang kalés [adè ku=beli].*
 3 come from NOM 1SG.LOW.AFFIX=buy
 「彼は私が買ったの（家など）から来た。」
- (3) *ku=bèang=lamóng' kó' [adè ka=ku=tulóng].*
 1SG.LOW.AFFIX=give=clothes to NOM PERF=1SG.LOW.AFFIX=help
 「私は私を助けてくれた人に服をやった。」

1 ただし、名詞節が前置詞 *kó'*（方向「～へ」）の句に後続する例は容認されない。また、前置詞 *ké'* が道具を表す場合、名詞節がその前置詞句に後続する例も容認されない。「彼は私が買ったもの（家など）に行った」「彼は私が買ったもの（ナイフなど）で肉を切った」という内容を意図して作例した以下の文はいずれも話者に容認されない。

(a) **nya laló lakó' [adè ku=beli].*
 3 go to NOM 1SG.LOW.AFFIX=buy
 （期待される意味）「彼は私が買ったもの（家など）に行く。」

(b) **nya tetak empá' ké' [adè ku=beli].*
 3 cut meet with NOM 1SG.LOW.AFFIX=buy
 （期待される意味）「彼は私が買ったもの（ナイフなど）で肉を切る。」

(a),(b)が容認されないのは、構造的な制限による可能性もあるが、表すことを意図した内容が不自然であることによるという可能性もある。

8.2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合

- (4) *nya datang ké' [adè enti-boat pang' bang].*
 3 come with NOM work at bank
 「彼は銀行で働いている人と来た。」
- (5) *nya enti-boat umén [adè tedu pang' balé].*
 3 work for NOM stay at house
 「彼は家にいる人のために働いている。」
- (6) *ada' adè balong antara [adè ka=ku=beli]?*
 exist NOM good among NOM PERF=1SG.LOW=buy
 「私が買ったもののなかにはいいものはありましたか。」
- (7) *ka=bèang' ku lamong' léng [adè ku=serango'].*
 PERF=give 1SG.LOW.AFFIX clothes by NOM 1SG.LOW.AFFIX=raise
 「私は私が育てた人に服をもらった。」

2.2 名詞節が補語を形成する場合

adè 名詞節はすべてのタイプの文の補語になりうる。*lók* 名詞節は、名詞句を述部とする文、動詞句を述部とする文の補語になりうる。

adè 名詞節が補語として機能する場合

(8)は前置詞句を述部とする文の補語、(9)は名詞句を述部とする文の補語として現れている例である。

- (8) *[adè datang kóta sapèrap=nan] pang' Hotèl=Tambora.*
 NOM come to here yesterday=that at hotel=Tambora
 「昨日来た人はタンボラホテルにいる。」
- (9) *[adè datang kóta sapèrap] tau=Belanda*
 NOM come to here yesterday person=Holland
 「昨日来た人はオランダ人だ。」

(10)は名詞節が自動詞構文の補語として、(11)(12)は名詞節が他動詞構文の補語として用いられている例である。

- (10) *teri' [adè ka=ku=beli].*
 fall.down NOM PERF=1SG.LOW.AFFIX=buy
 「私が買ったものが落ちた。」
- (11) *[adè ka=ku=beli] ku=bèang' lakó' nya*
 NOM PERF=1SG.LOW.AFFIX=buy 1SG.LOW.AFFIX=give to 3
 「私が買ったものを私は彼にやった。」

8.2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合

- (12) [adè ka=ku=tulóng] bèang' ku lamong'
 NOM PERF=1SG.LOW.AFFIX=help give 1SG.LOW.AFFIX clothes
 「私が助けた人が私に服をくれた。」

いずれの場合も、名詞節が構成する補語は、他の一般の補語と同様の統語的機能を持つ。語順などの制約はない。

(13)のように名詞節が名詞を述部とする文の補語として現れる文は、(14)のように名詞節中の動詞句がそのまま述部として現れる文と類似の内容を表す。

- (13) nya=Amén [adè ka=samaté=nya].
 TITLE=Amén NOM PERF=kill=3
 「彼を殺したのはアミンだ。」

- (14) ka=samaté nya léng nya=Amén .
 PERF=kill 3 by TITLE=Amén 「アミンは彼を殺した。」

この場合、二つの文の間には談話的な違いがある。(13)は、名詞節形成詞 *adè* に後続する文の表す内容、つまり、誰かが彼を殺したという事実が、話者と聞き手の間で了解済みの前提であり、残りの部分 *nya=Amén* の表す内容が談話の焦点であることを示す。一方、対応する文(14)は、形式上文の情報構造を明示しない

lók 名詞節が補語として機能する場合

lók 名詞節は、特定の動詞を述部の主要部とする文の成分として現れる。主文における *lók* 名詞節の機能は主文の動詞のタイプによって(i)-(iii)のように分類できる。

(i) *lók* 名詞節が主文の主語に相当する場合

主文の述部の主要部が評価などを表す自動詞 (*balong* 「よい」、*sukór* 「僥倖だ」、*lengè* 「悪い」など) である場合。

(全体で「～するのはよい」、「～するのは悪い」などの内容を表す。)

- (15) balong [lók datang kóta nya].
 good NOM come to.here 3
 「彼がここに来るのはよい。」

- (16) [lók datang kóta nya] balong.
 NOM come to.here 3 good 「彼がここに来るのはよい。」

(ii) *lók* 名詞節が主文の目的語に相当する場合

主文の述部の主要部が認知、伝達²などを表す他動詞である場合。(以下に動詞の例を挙げる。)

to' 「知る」, *sadu'* 「信じる」, *gita'* 「見る」, *ampén* 「許す」
ènèng-maaf 「許しを乞う、あやまる」, *angóp* 「能力がある、請け合う」
setuju 「賛成する」, *bajangi* 「約束する」, *bada'* 「伝える」
totang' 「おぼえている」, *kalupa'* 「忘れる」

(17)(18)に *to'* 「知る」の例を挙げる。ここでは、*lók* 名詞節が文の目的語として扱われている。

(17) *nya=Amén to' [lók si=Siti molé']*.
 TITLE=Amén know NOM TITLE=Siti go.home
 「アミンはシティが帰ったことを知っている。」

2 伝達・発話を表す動詞の構文としては、ここで扱う名詞節が現れるものの他に、従属文が現れるものがある。そのような構文については4.2, 4.3で扱う。

また、ある内容が話し手以外の発話であることを示す方法としては、伝達を表す動詞を用いるほかに、「ことば」を表す名詞 *léng* を用いる方法がある。以下に例を示す。

(a) *i, apa dènan, apa dènan né, léng lala manéng=ta é*
 oh what that what that you.know word noblelady bathe=this you.know
 「えっ、それは何？それは何？」と水浴びをしていた姫は言った。
 (lit. 「えっ、それは何？それは何？」水浴びをしていた姫のことば。)[LK166]

(b) *na sia=tomas-tomas ina' léng.*
 NEG.DESIRE 2SG.HIGH=noisy mother word
 「(ラル・クレクレは)『おかあさん、騒がしくしないでくださいね』と言った。」
 (lit. 「『おかあさん、騒がしくしないでくださいね』、ことば。)[LK047]

(a)では名詞*léng*を修飾する要素によっては、発話者(この場合は「姫」)が明示されている。一方、(b)では名詞*léng*が単独で表れており、発話者は明示されていない。

また、(a)(b)では、名詞*léng*は発話部分の最後に現れているが、(c)のように発話部分の途中に挿入される場合もある。

(c) *i, léng, dengan ku, léng, dengan=kaji ka mo*
 oh because company 1SG.LOW word company=1SG.HIGH PERF MM

bóé molé' sarèa' sanak=soai=kaji adè nam, léng
 gone go.home all female.sibléng=1SG.HIGH NOM six word

「『あの、連れが、私の六人の姉が、みな帰ってしまったものですから』と天女は言った。」
 [LK059]

(c)のような用例においては、*léng*は「ことば」を表す名詞としての機能ではなく、日本語の助詞「と」のように伝聞を標示する機能を持っていると考えられる。

8.2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合

- (18) [lók Si=Siti mólé'] to' léng=nya=Amén.
 NOM TITLE=Siti go.home know by=TITLE=Amén
 「アミンはシティが帰ったことを知っている。」

(19)(20)に *bada'* 「言う」の例を挙げる。ここでも、*lók* 名詞節が文の目的語として扱われている。

- (19) *ka=ku=bada'* nya [lók datang ina']
 PERF=1SG.LOW.AFFIX=tell 3 NOM come mother
 「私は彼に母親が来ることを伝えた。」

- (20) [lók datang ina'] *ka=ku=bada'* nya
 NOM come mother perf=1SG.LOW.AFFIX=tell 3
 「私は彼に母親が来ることを伝えた。」

(iii) *lók* 名詞節が発話を表す自動詞と共起する場合。

lók 名詞節は、発話を表す自動詞 *ramada'* 「伝える」、*bléng* 「言う」とも共起し、発話の内容を表す。

(21)(22)に *ramada'* 「言う」の例を挙げる。

- (21) *ramada'* nya [lók tau=nan ka=laló].
 tell 3 NOM person=that PERF=go
 「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

- (22) [lók tau=nan ka=laló] *ramada'* nya.
 NOM person=that PERF=go tell 3
 「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

これらの動詞は自動詞であり、単文では目的語と共起することがない。この場合は、*lók* 名詞節は単文の構成要素にはあらわれない付加的な要素を表すということになる。

lók 節と共起するのは上記(i)-(iii)に示したタイプの動詞に限られる。たとえば、一種の「使役」を表す動詞 *bèang'* 「～を許す」、*suru'* 「～を命じる」の文には *lók* 節は現れない。たとえば動詞 *suru'* 「～を命じる」の文に *lók* 節が現れている(23)(24)のような文は容認されない。

- (23) **suru'* nya léng nya=Amén [lók berari']
 order 3 by TITLE=Amén NOM run
 (期待される意味)「アミンは彼に走ることを命令した。」

8.2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合

- (24) **suru' léng nya=Amén [lók nya berari']*
 order by TITLE=Amén NOM 3 run
 (期待される意味)「アミンは彼に走ることを命令した。」

動詞*suru'*「～を命じる」およびこれに類する動詞の構文はこの章の第5節(5.3)で扱う³。

2.3 名詞節が文の述部である場合

以下に例を示す。

- (25) *tau=nan [adè ka=ku=gita' nana].*
 person=that NOM PERF=1SG.LOW.AFFIX=see over.there
 「その人は、私がむこうで見た人だ。」

- (26) *adè balong=nan [adè balong].*
 NOM good=that NOM good
 「よいものがよい。」

上の文(25)(26)は、名詞節が名詞節化されていない以下の(27)(28)のような文とそれぞれ同様の命題を表す。

- (27) *ka=ku=gita' tau=nan nana.*
 PERF=1SG.LOW.AFFIX=see person=that over.there
 「その人は、私がむこうで見た人だ。」

- (28) *adè balong=nan balong.*
 NOM good=that good
 「よいものがよい。」

前項で扱った(13)(14)のペアと同様、この場合も、述部が名詞節の形で現れている文(25)(26)と対応するそうでない文(27)(28)の間には談話的な違いがある。具体的に言えば、(25)(26)では、名詞句が表す内容は、話者と聞き手の間で前提として認識されているのに対して、対応する文(27)(28)においてはそうであるとは限らない。(25)は「私が誰かをむこうでみたこと」が前提として認識されている場合に用いられるが、(27)は必ずしもそのような

3 (23)(24)に対応する容認される文を(a)=(153))に挙げる。

(a) *suru' nya léng nya=Amén [berari']*
 order 3 by TITLE=Amén run
 「アミンは彼に走るように命令した。」

場合に用いられるとは限らない。また、(26)は「何かよいものがある」ことが前提として認識されている場合に用いられるが、(28)は必ずしもそのような場合に用いられるとは限らない。

2.4 名詞節が名詞句内の修飾成分として機能する場合

adè によって形成される名詞節は、名詞に後続して修飾を行うことがある。

第5章 8.1 で述べたように、*adè* によって形成される名詞節は、それを形成する文において名詞句補語で現れうる内容、つまり述部の表す状況における主体、対象、受け手を表す。名詞節が修飾する事物は、名詞節内の述部との意味関係に関して名詞節全体と同じものを表す。

名詞節に含まれる文の述部の主要部が前置詞句である場合、修飾を受ける名詞は、名詞節に含まれる文に置ける名詞句補語に相当する内容、つまり、前置詞句の表す内容の主体に相当する事物を表す。

- (29) *lamóng* [*adè umén sia*].
clothes NOM for 2SG.HIGH 「あなたのための服」

名詞節に含まれる文の述部の主要部が副詞句である場合、修飾を受ける名詞は、名詞節に含まれる文に置ける名詞句補語に相当する内容、つまり、副詞句の表す内容の主体に相当する事物を表す。

- (30) *pipés* [*adè sapèrap*].
money NOM yesterday 「昨日のお金」

名詞節に含まれる文の述部の主要部が自動詞である場合、修飾を受ける名詞は、名詞節に含まれる文における名詞句補語に相当する内容、つまり、自動詞の表す内容の主体に相当する事物を表す。

- (31) *tau* [*adè balong ke' aku*].
money NOM good with 1SG.LOW
「私と仲のよい人」

- (32) *tau* [*adè mólé' kó' dèsa*].
person NOM come to village
「故郷に帰った人」

名詞節に含まれる文の述部の主要部が他動詞である場合、修飾を受ける名詞は、名詞句に含まれる文における名詞句補語に相当する内容、つまり、他動詞の表す内容の動作主体、動作の対象、またはもののやり取りの受け手に相当する事物を表す。

8.2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合

述部の主要部が一般的な他動詞である場合、修飾を受ける名詞は動作主または動作の対象を表す。他動詞 *tari*「待つ」の例を挙げる。(33)は動作主を表す名詞が修飾されている例、(34)は動作の対象を表す名詞が修飾されている例である。

(33) *ina'* [adè *tari=nya nana*]=nan
 mother NOM wait=3 over.there=that
 「その、彼をむこうで待っている母親」

(34) *ina* [adè *tari léng nya*]=nan
 mother NOM wait by 3=that
 「その、彼が待っている母親」

述部の主要部がもののやりとりを表す他動詞である場合は、修飾を受ける名詞はやりとりの主体、やりとりされるもの、やりとりの受け手のいずれかに相当する。修飾される名詞は(35)ではやりとりの主体に、(36)ではやり取りされるものに、(37)ではやりとりの受け手に相当している。

(35) *datu* [adè *ka=bèang' sisén tau=dadara=nan*].
 person NOM PERF=give ring person=young=that
 「その娘に指輪をやった王様」

(36) *sisén* [adè *ka=bèang' lakó' tau=dadara=nan léng datu*].
 person NOM PERF=give ring person=young=that by king
 「王様はその娘にやった指輪」

(37) *tau=dadara* [adè *ka=bèang' sisén léng datu*].
 person=young NOM PERF=give ring by king
 「王様に指輪をもらった娘」

2.1-2.3 でそれぞれ述べたように、名詞節は前置詞句の構成要素として、補語として、または、述部として一般の名詞と同様の統語的機能を持つ。ここで扱った環境においても、名詞節は主名詞に後続し、修飾成分として機能するという点で、構造上は一般の名詞と同様の統語的機能を持つ。

しかし、名詞節が修飾成分として機能する場合の名詞節と主名詞の意味的關係は、一般的な名詞が修飾成分である場合の修飾成分と主名詞の關係よりは限定されたものである。

第5章 2.3.1 で述べたように、名詞が修飾成分である場合、修飾成分と主名詞の意味的關係には以下のものがある。

(i) 後続する名詞句が、先行する名詞の指示物の持ち主を表す。

8.2 名詞節が文の成分または文の構成要素の成分である場合

balé guru=kaku
house teacher=1SG.LOW.GEN 「先生の家」

(ii) 先行する名詞が後続する名詞句の指示物の一部を表す。

lampak nè ku
palm foot 1SG.LOW.AFFIX 「私の足の裏側、足のひら」

(iii) 後続する名詞句が先行する名詞の指示物の内容、テーマを表す。

buku sejara=Samawa'
book history=Sumbawa 「スンバワの歴史についての本」

(iv) 後続する名詞句が先行する名詞の指示物の種類を表す。

empa' kebó
meat buffalo 「水牛の肉」

bua' nangka
fruits jackfruits 「ナンカ（果物の一種）の実」

(v) 後続する名詞句が先行する名詞の指示物の材料を表す。

balé batu
house stone 「石の家」

(i)-(v)の関係は修飾成分の名詞の特性によってに[A][B]に分類できる。

[A]修飾成分の名詞が特定の指示対象を持つ場合。その指示対象と主名詞の指示物の全体 / 部分の関係が示される[(i)-(iii)]

[B]修飾成分の名詞が特定の指示対象を持たず、修飾成分が主名詞の名詞の指示物の属性を示す場合[(iv)(v)]

名詞節が修飾成分である場合、主名詞と名詞節の意味的關係は、常に[B]にあてはまり、[A]に示した関係が表されることはない。

(38)は上に挙げた(33)に含まれる名詞節の部分を抜き出したものである。また、(39)は上に挙げた(34)に含まれる名詞節の部分を抜き出したものである。このような単独の名詞節は特定の指示物を指しうる。

(38) *adè tari=nya nana=nan*
NOM wait=3 over.there=that
「その、彼をむこうで待っている者」

8.3 文が名詞節化されず直接名詞句内の修飾成分となる場合

- (39) [adè tari léng nya]=nan
NOM wait by 3=that
「その、彼が待っている者」

しかし、これらの名詞節が修飾成分として用いられる場合は、名詞節は特定の指示物を指すとは解釈されない。たとえば、(40)=(33)は常に「その、彼をむこうで待っている母親」という意味を表し、「その、彼をむこうで待っている者の母親」という意味にはならない。また、(41)=(34)は「その、彼が待っている母親」という意味を表し、「その、彼が待っている者の母親」という意味は表さない。

- (33) ina' [adè tari=nya nana]=nan
mother NOM wait=3 over.there=that
「その、彼をむこうで待っている母親」

- (34) ina' [adè tari léng nya]=nan
person NOM wait by 3=that
「その、彼が待っている母親」

このことから、修飾成分として機能する名詞節は、同様の位置に現れる一般的な名詞とまったく同様の意味的機能を持つわけではないことがわかる。修飾成分として機能する名詞節は常にある種の属性を表し、主名詞は名詞節中の述部が表す状況の関与者に相当する。この種の名詞節の機能は、多くの言語で「関係節」として扱われている要素の機能に相当するといえる。

ここで扱った *adè* 節に相当する内容が、名詞節形成詞を伴わないで現れる場合、つまり、単文が名詞節形成詞を伴わないで直接名詞句内の修飾成分として現れる場合もある。そのような場合については次項で述べる。

3 文が名詞節化されず直接名詞句内の修飾成分となる場合

前項の終わりで触れたように、名詞節形成詞を伴わない文が名詞を直接修飾することがある。ここでは、そのような場合のうち、述部の主要部が動詞である場合を扱う。(それ以外の場合は、文が名詞を修飾しているとみなすより、名詞、前置詞句、副詞が名詞を修飾しているとみなす方がよいと考えられる。)

この場合、修飾を行う文の述部の主要部と、修飾される名詞の意味的關係は、上の *adè* 名詞節による修飾の場合と同じである。修飾される名詞は、後続する文において名詞句補語で現れうる要素、つまり、述部の主要部が自動詞の場合はその表す内容の主体(42)、他動詞である場合はその表す内容の主体(43)および動作の対象(44)、もののやりとりの受け手

8.3 文が名詞節化されず直接名詞句内の修飾成分となる場合

(45)である。以下の例では修飾成分である文を[]内に入れて示す。

(42) *tau* [balong ké' aku].
 person good with 1SG.LOW 「私と仲のよい人」

(43) *tau* [tari nya nana].
 person wait 3 over.there
 「彼をむこうで待っている人」

(44) *tau* [tari léng nya].
 person wait by=3
 「彼が待っている人」

(45) *tau=dadara* [ka=bèang' sisén léng datu].
 person=young PERF=give ring by king
 「王様に指輪をもらった娘」

このように文が直接名詞句の修飾成分となりうるのは、述部が静的な状況を表すときに限られている。以下のように、動的な状況を表す述部が修飾成分となっている名詞句は話者に容認されない。

(46) **tau berari'*.
 person run
 (期待される意味) 「走る人、走っている人」

述部が動的な状況を表す場合は、名詞節形成詞によって名詞化されることによって始めて修飾成分となりうる。(46)に対応する容認される例を(47)に示す。

(47) *tau* [adè berari'].
 person NOM run 「走る人」

ただし、(45)にみられるように、完了のアスペクト辞 *ka* が付いた形は名詞節形成詞の付かない形で修飾成分となりうる。これは、*ka* の付いた形がある状況が成立した結果としての状態を表すからであると考えられる。(46)(47)に対応する例を(48)(49)に示す。

(48) *tau* [ka=berari'].
 person PERF=run 「走った人」

既に述べたように、修飾を受けるのは、原則として修飾を行う文において名詞句補語として現れうる要素(動作主体、動作の対象など)である。常に前置詞句補語の形で現れる

8.3 文が名詞節化されず直接名詞句内の修飾成分となる場合

要素、たとえば場所や随伴者などは修飾を受けることがない。たとえば、「私があなたを待っている家」「私が（一緒に）バリに行った人」という意味を意図して作例した以下のような文は話者に容認されない。

- (49) *balé [ku=tari sia].
house 1SG.LOW.AFFIX=wait 2SG.HIGH
(期待される意味)「私があなたを待っている家」

- (50) *tau [ku=laló kó' Bali].
person 1SG.LOW.AFFIX=go to Bali
(期待される意味)「私が一緒にバリに行った人」

ただし、いくつかの抽象的な内容を表す名詞は直接文の修飾語となりうる。

たとえば「場所」を表す名詞、*pang'*や「随伴者」を表す*dengan*は被修飾語となりうる⁴。

・*pang'*「場所」：場所を表す

- (51) pang' [ku=tari sia].
place 1SG.LOW.AFFIX=wait 2SG.HIGH 「私があなたを待っている場所」

- (52) pang' [ka=sia=tanam=padé].
place PERF=2SG.HIGH=plant=rice plant
「あなたが稲を植えたところ」

・*dengan*「連れ」：随伴者を表す

- (53) dengan [ka=laló kó' Bali].
companion perf=go to Bali 「（一緒に）バリに行った連れ」

- (54) dengan [ku=enti-boat nana].
company 1SG.LOW.AFFIX=work over.there
「私がむこうで（一緒に）働いている連れ」

具体的な場所、連れについて言及する場合は、具体的な内容を表す名詞句の後に上記のような *pang'*, *dengan* を用いた名詞節を修飾成分として用いる。

- (55) balé pang' [ku=tari sia].
house place 1SG.LOW.AFFIX=wait 2SG.HIGH
「私があなたを待っている家」

- (56) tau=Belanda dengan [laló kó' Bali]

4 この名詞 *pang'*「場所」は、場所を表す前置詞 *pang'*「～に、～で」と同形である。

8.3 文が名詞節化されず直接名詞句内の修飾成分となる場合

person=Holland company go to Bali 「(一緒に)バリに行くオランダ人」
また名詞 *rungan* 「知らせ」、*lók* 「様態、方法」、*cara* 「様態、方法」、*léng* 「ことば」も、
直接文に修飾されうる。

・ *rungan* 「知らせ」

(57) *rungan* [mólé' kó' dèsa nya].
news go.back to village 3
「彼が帰郷するという知らせ」

・ *lók* 「様態、方法」

(58) *lók* [kakan' jembrai' raras].
way eat vegetable raras
「ララス(空芯菜)を食べる方法、様態」

・ *léng* 「ことば」

(59) *léng* [bléng nya].
words speak 3
「彼がいったことば」

動作主、動作の対象等を修飾する成分と異なり、これらの名詞を修飾する要素に関しては、静的な状況を表すという制約はみられない。たとえば、(57)-(59)のように、動的な状況を表す文が修飾を行う例も許容される。

4 従属文1(完全な文として現れるもの)

この章と次章では、従属文のうち接続詞を伴わないものを扱う。

1で述べたように、接続詞を伴わない従属文には完全な文として現れるもの(その述部が単文に現れる場合と同様の補語と共起する場合)とそうでないものがある。ここでは前者について述べる。

この種の従属文は補語として機能する *lók* 名詞節と同様の環境[以下の(I)-(III)]に現れる。(補語として機能する *lók* 名詞節についてはこの章の2.2で述べた。)

[I] 従属文が主文の主語に相当する場合(主文の述部の主要部が評価などを表す自動詞である場合)

[II] 従属文が主文の目的語に相当する場合(主文の述部の主要部が認知などを表す他動詞である場合)

[III] 従属文が主文の主語にも目的語にも相当しない付加的な要素として現れる場合(主文

の述部の主要部が発話を表す自動詞である場合)

それぞれの場合について 4.1-4.3 で順に述べる。

4.1 従属文が主文の主語に相当する場合

文 1 の述部の主要部が評価を表す動詞である場合は、評価の対象である状況を表す文が主文の主語に相当する従属文として現れる。

この種の構文の主文に現れる動詞としては *balong* 「よい」、*sukór* 「僥倖だ」、*lengè* 「よくない」が確認されている。

以下に *balong* 「よい」の例を挙げる。

(60) *balong* [*datang kóta nya*].

good come to.here 3

「彼がここに来るのはよい。」

(61) *nongka balong* [*datang kóta nya*].

NEG.PERF good come to.here 3

「彼がここに来るのはよくない。」

ただし、単文における主語と異なり、従属文が主文の述部に先行することはない。これは、接続詞を伴うものの一部をのぞく、すべての従属文に共通する特徴である。(60)に対応する(62)、(61)に対応する(63)のような文は容認されない。

(62) **[datang kóta nya] balong*.

come to.here 3 good

(期待される意味)「彼がここに来るのはよい。」

(63) **[datang kóta nya] nongka balong*.

come to=here 3 NEG.PERF good

(期待される意味)「彼がここに来るのはよくない。」

従属文として現れうる文の語順に特に制約はない。上の(61)と下の(64)を対照されたい。(61)のように従属文中で述部が補語に先行している文に対して、(64)のように補語が述部に先行している文も容認される。

(64) *nongka balong* [*nya datang kóta*].

NEG.PERF good 3 come to.here

「彼がここに来るのはよくない。」

4.2 従属文が主文の目的語に相当する場合

主文の述部の主要部が認知、伝達などを表す他動詞である場合、認知や伝達の内容である状況を表す文が従属文として現れうる。この場合に主文の述部の主要部に現れうる動詞は、2.2 で扱った *lók* 名詞節を目的語として取る場合に述部に現れうる動詞と同様で、以下のようなものがある。

to' 「知る」, *sadu'* 「信じる」, *gita'* 「見る」, *ampén* 「許す」
ènèng-maaf 「許しを乞う、あやまる」, *angóp* 「能力がある、請け合う」
setuju 「賛成する」, *bajangi* 「約束する」, *bada'* 「伝える」
totang' 「おぼえている」, *kalupa'* 「忘れる」

まず、認知を表す *to'* の例を挙げる。

- (65) *nya=Amén to' [si=Siti mólé']*.
 TITLE=Amén know TITLE=Siti go.home
 「アミンはシティが帰ったことを知っている。」

前項で扱った従属文と同様、この場合も従属文は主文の述部の前に現れない。(66)のような文は容認されない。

- (66) *[*mólé' si=Siti to' léng nya=Amén*.
 go.home TITLE=Siti know by TITLE=Amén
 (期待される意味)「アミンはシティが帰ることを知っている。」

上記の制約を除けば、従属文の文中での位置に制約はなく、従属文と主文の主語の相対的語順にも制約はない。(65)に対して(67)(68)のような文も容認される。

- (67) *to' léng nya=Amén [si=Siti mólé']*.
 know by TITLE=Amén TITLE=Siti go.home
 「アミンはシティが帰ることを知っている。」

- (68) *to' [si=Siti mólé'] léng nya=Amén*.
 know TITLE=Siti go.home by TITLE=Amén
 「アミンはシティが帰ることを知っている。」

従属文内の語順に特に制約はない。上の(65)(67)(68)の従属文内では補語が述部に先行しているが、それぞれ述部が補語に先行している(69)-(71)のような文も容認される。

- (69) *nya=Amén to' [mólé' si=Siti]*.
 TITLE=Amén know go.home TITLE=Siti
 「アミンはシティが帰ることを知っている。」

8.4 従属文 1 (完全な文として現れるもの)

(70) *to' léng nya=Amén [mólé' si=Siti].*
 know by TITLE=Amén go.home TITLE=Siti
 「アミンはシティが帰ることを知っている。」

(71) *to' [mólé' si=Siti] léng nya=Amén.*
 know go.home TITLE=Siti by TITLE=Amén
 「アミンはシティが帰ることを知っている。」

次に伝達を表す動詞 *bada'* の例を挙げる。

(72) *bada' pelisi léng nya=Amén [tau=nan ka=nyóró].*
 tell police by TITLE=Amén person=that PERF=steal
 「アミンはその人が盗みをしたのだと警察官に伝えた。」

従属文は、他動詞 *to'* 「知っている」が主文の主要部である場合と同様の形で現れる。(72)のような文に対して、従属文が主文の述部の前に現れている(73)のような文は容認されない。

(73) **[tau=nan ka=nyóró] bada' pelisi léng nya=Amén.*
 person=that PERF=steal tell police by TITLE=Amén
 「アミンはその人が盗みをしたのだと警察官に伝えた。」

従属文と主文の主語の相対的語順には制約がない。(72)に対して(74)のような文も容認される。

(74) *bada' pelisi [tau=nan ka=nyóró] léng nya=Amén.*
 tell police person=that PERF=steal by TITLE=Amén
 「アミンはその人が盗みをしたのだと警察官に伝えた。」

また、従属文中の語順には特に制約はない。(72)のように従属文内で補語が述部に先行している文に対して、述部が補語に先行している(75)のような文も容認される。

(75) *bada' pelisi léng nya=Amén [ka=nyóró tau=nan].*
 tell police by TITLE=Amén PERF=steal person=that
 「アミンはその人が盗みをしたのだと警察官に伝えた。」

4.3 発話・伝達を表す自動詞と共起する従属文

発話を表す動詞のうち、*ramada'*⁵「伝える」、*bléng*は自動詞である。これらの動詞は発話・

5 *ramada'*は他動詞*bada'*に自動詞を形成する接頭辞*bar-*が付接した形である。(接頭辞*bar-*については第4章 2.1.3 で述べた。)

8.4 従属文 1 (完全な文として現れるもの)

伝達を表す他動詞 *bada'* と同様に発話・伝達の内容を表す従属文と共起する。

ramada' 「告げる」の例を示す。

- (76) *ramada' nya [tau=nan ka=laló].*
tell 3 person=that PERF=go
「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

この種の従属文は前項 4.2 で扱った他動詞 *to'* 「知っている」、他動詞 *bada'* 「伝える」と共起する従属文と同様の現れ方をする。

(77)のように、従属文が主文の述部の前に現れる例は容認されない。

- (77) **[ka=laló tau=nan] ramada' nya.*
PERF=go person=that tell 3
(期待される意味)「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

主文の主語と従属文の語順はどちらが先でもよい。(76)に対応する(78)のような文も容認される。

- (78) *ramada' [tau=nan ka=laló] nya.*
tell person=that PERF=go 3
「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

また、従属文内の語順にも特に制約はない。(76)に対応する(79)のような文も容認される。

- (79) *ramada' nya [ka=laló tau=nan].*
tell 3 PERF=go person=that
「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

主文の主要部が *bléng* 「言う」である場合にも同様のことがいえる。

この種の従属文は前項まで扱ってきた従属文と異なり、主文の主語にも目的語にも相当しない、副詞成分的な要素であるといえる。

4.4 4 のまとめ

4.1-4.3 で扱った従属文に共通する特徴として以下の点が挙げられる。

- (i) 従属文は単文と同じ統語的機能をもつ。(単文と同じ構成要素を持つ。また、構成要素間の語順に関して単文と同様の規則を持つ。)
- (ii) 従属文は主文の述部の前には現れない。

この節の冒頭で述べたように、この種の従属文はすべて名詞節形成詞 *lók* の節に置き換えられうる。(名詞節形成詞 *lók* の節が補語として機能する場合には、この章の 2.2 で扱

8.4 従属文 1 (完全な文として現れるもの)

った。)たとえば、(80)-(82)に対応する文として、(83)-(85)のような文が容認される。この場合、*lók* 節が現れている文と、そうでない文の間に意味の違いは観察されない。

(80)=(60) *balong* [*datang kóta nya*].
good come to.here 3

「彼がここに来るのはよい。」

(81)=(65) *nya=Amén to'* [*si=Siti mólé'*].
TITLE=Amén know TITLE=Siti go.home

「アミンはシティが帰ることを知っている。」

(82)=(76) *ramada' nya* [*tau=nan ka=laló*].
tell 3 person=that PERF=go

「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

(83)=(15) *balong* [*lók datang kóta nya*].
good NOM come to.here 3

「彼がここに来るのはよい。」

(84)=(17) *nya=Amén to'* [*lók Si=Siti mólé'*].
TITLE=Amén know NOM TITLE=Siti go.home

「アミンはシティが帰ることを知っている。」

(85)=(21) *ramada' nya* [*lók tau=nan ka=laló*].
tell 3 NOM person=that PERF=go

「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

ただし、名詞節形成詞を伴わない従属文と異なり、*lók* 名詞節は主文の述部の前に現れうる。(80)-(82)の従属文が主文の述部の前に現れないのに対して、(83)-(85)の *lók* 名詞節は述部の前に現れうる。(83)-(85)に対応する文(86)-(88)はいずれも容認される。

(86)=(16) [*lók datang kóta nya*] *balong*.
NOM come to.here 3 good

「彼がここに来るのはよい。」

(87)=(18) [*lók Si=Siti mólé'*] *to' léng=nya=Amén*.
NOM TITLE=Siti go.home know by=TITLE=Amén

「アミンはシティが帰ることを知っている。」

8.4 従属文 1 (完全な文として現れるもの)

- (88)=(22) [lók tau=nan ka=laló] ramada' nya.
NOM person=that PERF=go tell 3
「その人が行ってしまったことを彼が告げた。」

このことから、lók の名詞節が文中で一般的な補語と完全に同様の機能を持つものに対して、ここで扱った従属文はそうではないことがわかる。

5 従属文 2 (完全な文としては現れないもの)

ここでは従属文が完全な文としては現れない場合を扱う。

この構文は、主文中の特定の要素(主語、目的語、動作の受け手を表す要素)の指示物と従属文の主語、または目的語⁶が同一指示である場合に観察される。この場合、主文と従属文に共通する要素は、従属文中には現れない。

この種の構文は主文と従属文の「共通の要素」のタイプによって次のように分類することができる。

[I] 主文の主語と従属文の主語が同一指示である場合

これは、具体的には、主文の述部の主要部が移動、様態または感情を表す場合である。(この場合、主文は全体で日本語の「歩いて～(移動)する」「忙しく～する」「こわごわ～する」などに相当する内容を表す。)

[II] 主文の目的語と従属文の主語、または目的語が同一指示である場合

これは、具体的には、主文の述部の主要部が動詞 *gita* '見る' または *ingo* '見る' である場合である。(この場合、従属文は知覚される状況を表し、全体で「～が～するのを見る」「～が～されるのを見る」などの内容を表す。)

[III] 主文における行為(命令など)の受け手と従属文の主語が同一指示である場合

これは、具体的には、主文の述部の主要部が命令、依頼などを表す他動詞である場合である。(この場合、従属文は命令、依頼の内容を表し、全体で「～するように言う」「～するように頼む」などの内容を表す。)

ここで扱う従属文に共通する特徴として、主文内の成分として「付加的である」あるいは副詞成分的であるという特徴がある。この種の構文を主文の述部が単文に現れた場合の構文と比べた場合、この構文における従属文は対応する単文中の成分を持たない。(前節(4.1, 4.2)で扱った従属文と異なり、主文中の主語にも目的語にも対応しない。)

6 これに続く部分で述べるように、従属文中には「共通の関与者」を表す要素は現れないので、この部分は正確に言えば、「従属文中の述部が単文に現れる場合の主語、または目的語に相当する要素」ということになる。これは以下(I)-(III)の記述においても、またそれぞれの場合についての記述 5.1-5.3 においても同様である。

以下の部分では、それぞれの場合について順に述べる。

5.1 主文の主語と従属文の主語が同一指示である場合

次の5つの場合に分類できる。

[A] 主文の述部が移動を表す場合

[B] 主文の述部が感情を表す場合

[C] 主文の述部が様態を表す場合

[D] 主文の述部の主要部が *bau* '「～できる」' である場合

[E] 主文の述部の主要部、または従属文の述部の主要部が付帯状況を表す動詞 *kèngang* '「使う」' または *berma* '「一緒に～する、伴う」' である場合

それぞれの場合について以下に述べる。以下の例文では従属文を[]に入れて示す。

[A] 主文の述部が移動を表す場合

主文の述部が移動を表す場合、従属文はその移動の様態を表す。

この構文に現れる動詞には、*laló* '行く'、*datang* '来る'、*mólé* '帰る' が確認されている。移動を表す動詞のうち、移動の様態をその意味に含むもの、たとえば *belangan* '歩く'、*berari* '走る' などはこの位置には現れない。

ここでは、主文の述部の主要部が *laló* '行く' である場合を例に挙げる。

(89)では、従属文の述部の主要部は他動詞 *entèk* で、主文の表す状況の主体(移動の主体)と従属文の表す状況の主体(バイクタクシーに乗る主体)が同一で、それを表す要素は名詞句補語の形で現れている。

(89) *laló* [entèk ojèk=nan] *nya=Amén.*
 go ride bike-taxi=that TITLE=Amén
 「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

主体が話し手または聞き手である場合、述部内の人称を表す要素は主文の述部に現れる。

(89)' *ku=laló* [entèk ojèk=nan] *aku.*
 1SG.LOW.AFFIX=go ride bike-taxi=that 1SG.LOW
 「私はバイクタクシーに乗って行った。」

(89)に対して、主体を表す要素が、前置詞句補語で現れている(90)のような文は容認されない。

(90) **laló* [entèk ojèk=nan] *léng nya=Amén.*
 go ride bike-taxi=that by TITLE=Amén
 (期待される意味)「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

よって、この場合主体を表す補語は、構造的には主文の主語であると解釈される。

8.5 従属文 2 (完全な文としては現れないもの)

主文の表す状況と従属文の表す状況に共通する動作主を表す要素は文全体の中で一度しか現れない。次のようにそれぞれの動作主に相当する要素が現れている文は容認されない。

- (91) **nya=Amén laló [entèk ojèk=nan] léng nya=Amén.*
 TITLE=Amén go ride bike-taxi=that by TITLE=Amén
 (期待される意味)「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

(91)で二回現れている *nya=Amén* の一方を人称詞 *nya* に代えた(91)'のような文も容認されない。

- (91)' **nya=Amén laló [entèk ojèk=nan] léng nya.*
 TITLE=Amén go ride bike-taxi=that by 3
 (期待される意味)「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

以上のことから従属文の主語は文中には現れないということがわかる。

前項までに扱った他の従属文と同様、この場合も従属文は常に主文の述部の後に現れる。従属文が主文の述部の前に現れている(92)のような文は容認されない。

- (92) *[*entèk ojèk=nan*] *laló nya=Amén.*
 ride bike-taxi=that go TITLE=Amén.
 (期待される意味)「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

主文の主語と従属文の相対的語順には制約がない。また、主文の主語は単文の主語同様述部に先行しうる。よって、(89)に対応する(93)(93)'のような文も容認される。

- (93) *laló nya=Amén [entèk ojèk=nan].*
 go TITLE=Amén ride bike-taxi=that
 「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

- (93)' *nya=Amén laló [entèk ojèk=nan].*
 TITLE=Amén go ride bike-taxi=that
 「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」
 (期待される意味)「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

また、従属文内の語順に関しては、常に述部が先行し、目的語は述部に後続するという制約がある。従属文内において目的語が述部に先行している文(94)は容認されない。

- (94) **nya=Amén laló [ojèk=nan entèk].*
 TITLE=Amén go bike-taxi=that ride

この種の構文は、第5章9で扱った動詞連続の構文と類似している。第5章9で挙げた動詞連続の例を(95)(96)に再掲する。

8.5 従属文 2 (完全な文としては現れないもの)

(95) *nya=Amén laló=buya lamóng=nan*
 TITLE=Amén go=look.for clothes=that
 「アミンはその服を探しに行った。」

(96) *laló=buya lamóng=nan léng nya=Amén.*
 go=look.for clothes=that by TITLE=Amén
 「アミンはその服を探しに行った。」

(95)(96)をここで扱ってきた複文(以下単に複文と呼ぶ)と比較されたい。(89)(93)(93)'を(97)(98)(98)'として再掲する。

(97)(=89)) *laló [entèk ojèk=nan] nya=Amén.*
 go ride bike-taxi=that TITLE=Amén
 「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

(98)(=93)) *laló nya=Amén [entèk ojèk=nan].*
 go TITLE=Amén ride bike-taxi=that
 「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

(98)'(=93)') *nya=Amén laló [entèk ojèk=nan].*
 TITLE=Amén go ride bike-taxi=that
 「アミンはバイクタクシーに乗って行った。」

(95)(96)の動詞連続と複文(89)(98)(98)'は、文全体に二つの動詞が現れ、最初の動詞が移動を表すという点、および、二つの動詞の表す動作の動作主が同一であるという点が同じである。しかし、二つの構文には次のような違いがある。

- ・意味の違い：動詞連続は移動の目的を表すのに対して、複文は移動の様態を表す。
- ・二つの動詞の結合度の違い：(95)(96)にみられるように、動詞連続においては二つの動詞は常に連続して現れ、強勢の単位を形成する。一方、(98)にみられるように、複文においては二つの動詞は常に連続して現れるとは限らない。また、(97)にみられるように、二つの動詞が連続して現れる場合も強勢の単位を形成することはない。
- ・補語の現れ方の違い：動詞連続においては、構文全体が自動詞構文であるか他動詞構文であるかは、移動を表す動詞ではなく、それに後続する動詞によって決まる。例えば、(96)では動作主を表す要素は、後続する動詞(他動詞 *buya*)に対応する形(つまり前置詞句補語の形)で現れている。一方、複文においては移動を表す動詞が主文の述部の主要部として扱われ、文全体は常に自動詞構文を取る。例えば(97)では動作主を表す要素は、先行する

動詞(自動詞 *laló*)に対応する形(名詞句補語の形)で現れている。

[B] 主文の述部が感情を表す場合

この種の構文に現れる動詞には *ketakét* 「こわがる」、*bosan* 「うんざりしている」、*nyaman* 「楽しい、楽だ」などがある。

(99)(100)は動詞 *ketakét* 「こわがる」が主文の述部の主要部である例である。ここでは感情を感じる主体と従属文の表す状況の主体が同一で、従属文は主文の述部が表す感情の原因である状況を表す。

まず、従属文の述部の主要部が自動詞である例を(99)に示す。二つの状況に共通する主体は名詞句補語の形で現れている。また、述部内に現れる人称を表す要素は主文の述部に現れる。

(99) *ku=ketakét* *aku* *lés* *mèsa'*.
 1SG.LOW.AFFIX=scared 1SG.LOW go.out alone
 「私はこわごわ一人で外に出た。」

(100)は従属文の述部の主要部が他動詞である例である。[A]の場合(主文の述部の主要部が移動を表す場合)と同様、二つの状況に共通する「主体」を表す要素は名詞句補語の形で現れており、それゆえ主文の主語であると解釈される。

(100) *ku=ketakét* *aku* [*kakan'* *jangan=matang*].
 1SG.LOW.AFFIX=scared 1SG.LOW eat fish=raw
 「私は生の魚をこわごわ食べた。」

この構文は、ある主体が恐怖を感じているという状況と、その原因である状況---(99)であれば「外に出かける」という状況、(100)であれば「生の魚を食べる」という状況---が「同時に」成立している場合にのみ用いられ、主体が外に出ること、あるいは、生の魚を食べることに對してあらかじめ恐怖を感じているという内容は表さない。

[A]の場合と同様、この場合も(i) 従属文は常に主文の後に現れる、(ii) 従属文内では常に述部が先行し、目的語は述部に後続するという制約がある。

(100)に対して、従属文が主文の述部の前に現れている文(101)、従属文中で目的語が述部に先行している文(102)はいずれも容認されない。

(101) * [*kakan'* *jangan=matang*] *ku=ketakét* *aku*.
 eat fish=raw 1SG.LOW.AFFIX=scared 1SG.LOW
 (期待される意味)「私は生の魚をこわごわ食べた。」

8.5 従属文2 (完全な文としては現れないもの)

- (102) **ku=ketakét* *aku* [*jangan=matangkakan'*].
 1SG.LOW.AFFIX=scared 1SG.LOW fish=raw eat
 (期待される意味)「私は生の魚をこわごわ食べた。」

[C] 主文の述部の主要部が様態を表す場合

主文の述部の主要部が様態を表す自動詞である場合も前項で扱った構文(主文の述部が移動や感情を表す場合)と同様の構文が現れる。この種の構文に現れる動詞には *sibók* 「忙しい」、*tomas* 「うるさい」、*balong* 「よい」などがある。

(103)-(105)は *sibók* 「忙しい」が主文の述部の主要部である例である。ここでは主文の表す状況の動作主と従属文の表す状況の動作主が同一で、従属文は忙しさの内容としての状況を表す。

- (103) *ku=sibók* [*bakedèk*].
 1SG.LOW.AFFIX=busy play
 「私は遊ぶのに忙しい」

この場合も、前項まで扱った[A][B]の場合と同様、「共通の関与者」を表す要素は主文の主語として現れる。(以下に示すように、従属文の述部の主要部が他動詞である場合も名詞句補語の形で現れる。)また、述部内に現れる人称を表す要素は主文の述部に現れる。

- (104) *ku=sibók* [*pina' tepóng=nan*] *aku*
 1SG.LOW.AFFIX=busy make cake=that 1SG.LOW
 「私は忙しくそのお菓子を作る。」

- (105) *ku=sibók* *aku* [*pina' tepóng=nan*].
 1SG.LOW.AFFIX=busy 1SG.LOW make cake=that
 「私は忙しくそのお菓子を作る。」

[B]の場合と同様、この構文も主文の表す状況と従属文の表す状況が「同時に」成立している場合にのみ用いられる。たとえば(101)(102)は、お菓子を作る予定があるから、今別のことを済ませておかなければならず、それゆえ忙しいというような場合には用いられない。

この場合も、(i)従属文は常に主文の述部の後に現れる、(ii)従属文内では常に目的語は述部に後続するという制約がある。

(106)のような例に対して、(107)のように従属文が主文に先行している文、および、(108)のように従属文内で目的語が述部に先行している文、は容認されない。

- (106) *ku=sibók* [*pina' tepóng=ta*].
 1SG.LOW.AFFIX=busy make cake=this 「私は忙しくそのお菓子を作る。」
 (107) * [*pina' tepóng=ta*] *ku=sibók*.

8.5 従属文2 (完全な文としては現れないもの)

make cake=this 1SG.LOW.AFFIX=busy
 (期待される意味)「私は忙しくそのお菓子を作る。」

(108) *ku=sibók [tepóng=ta pina’].
 1SG.LOW.AFFIX=busy cake=this make
 (期待される意味)「私は忙しくこのお菓子を作る。」

5.7 で触れたように、sibók のような様態を表す動詞は(109)のように副詞成分として現れる場合がある。この場合、人称を表す要素は様態を表す動詞に後続する述部に現れ、動作主を表す要素はその述部の主語として現れる。

(104)と(109)を対比されたい。

(109) sibók ku=pina’ tepóng=nan léng aku.
 busy 1SG.LOW=make cake=that by 1SG.LOW
 [副詞成分] [述部] [目的語] [主語]
 「私は忙しくそのお菓子を作る。」

(104)のような文と(109)のような文の意味的違いは確認していない。

[D] 主文の述部の主要部が *bau’* 「～できる」である場合

この場合も[A]-[C]で扱ったのと同様の構文が現れる。(110)に例を示す。

(110) ku=bau’ [nangè].
 1SG.LOW.AFFIX=busy swim
 「私は泳ぐことができる。」

[A]-[C]の場合と同様、「共通の関与者」は主文の主語によって表される。

(111)(112)では、従属文の述部の主要部は他動詞であるが、その動作の動作主を表す要素は主文の述部の主要部 *bau’* に合わせる形で名詞句補語の形で現れている。この場合、述部内に現れる人称を表す要素は主文の述部に現れる。

(111) ku=bau’ [pina’ tepóng=nan] aku
 1SG.LOW.AFFIX=can make cake=that 1SG.LOW
 「私はそのお菓子を作ることができる。」

(112) ku=bau’ aku [pina’ tepóng=nan].
 1SG.LOW.AFFIX=can 1SG.LOW make cake=that
 「私はそのお菓子を作ることができる。」

また、[A]-[C]の場合と同様、従属文が主文の述部の前に現れることはない。(113)のような文は容認されない。

- (113) **[pina=tepóng]* *ku=bau'*.
 make=cake 1SG.LOW.AFFIX=can
 (期待される意味)「私はそのお菓子を作ることができる。」

さらに、[A]-[C]の場合と同様、従属文内において、述部は常に目的語の前に現れる。(114)のように、従属文内で目的語が述部の前に現れている例は容認されない。

- (114) **ku=bau'* [*tepóng=ta pina'*].
 1SG.LOW.AFFIX=busy cake=that make
 (期待される意味)「私はこのお菓子を作ることができる。」

[C]で扱った様態を表す動詞 *sibók* と同様、*bau'* も、副詞成分として現れる場合がある。この場合、人称を表す要素は *bau'* に後続する述部に現れ、動作主を表す要素はその述部の主語として現れる。(111)と(115)を対比されたい。

- (115) *bau'* *ku=pina'* *tepóng=nan* *léng aku*.
 can 1SG.LOW.AFFIX=make cake=that by 1SG.LOW
 [副詞成分] [述部] [目的語] [主語]
 「私はそのお菓子を作ることができる。」

(111)のような文と(115)のような文の意味的違いは確認できていない。

[E]主文または従属文の述部の主要部が *berma* 「一緒に～する」、*kèngang'* 「使う」である場合まず、*berma* 「一緒に～する」の例を示す。

(116)は *berma* が主文に現れている例である。従属文の主要部は他動詞であるが、「共通の要素」は主文の主要部である自動詞 *berma* 「一緒に～する」に合う形、つまり名詞句補語の形で現れている。

- (116) *berma* *ké' ina'* [*pina' tepóng=nan*] *si=Siti*.
 accompany with mother come cake=that TITLE=Siti
 「シティは母親と一緒にそのお菓子を作る。」

この場合、述部内に現れる人称を表す要素は主文の述部に現れる。

- (117) *ku=berma* *ké' ina' ku* [*pina' tepóng=nan*]
 1SG.LOW.AFFIX=accompany with mother 1SG.LOW.AFFIX make cake=that
aku
 1SG.LOW
 「私は母親と一緒にそのお菓子を作る。」

(a)-(d)の従属文と同様、この場合、従属文は主文の述部の前には現れない。(117)に対応す

る文として(118)は容認されない。

- (118) *[*pina' tepóng=nan*] *ku=berma* *ké' ina' ku*
 make cake=that 1SG.LOW.AFFIX=accompany with mother 1SG.LOW.AFFIX
aku.
 1SG.LOW
 (期待される意味)「私は母親と一緒にそのお菓子を作る。」

また、従属文内では、常に述部が先行し、目的語は述部に後続する。(117)に対応する文として、従属文中で目的語が先行している(119)は容認されない。

- (119) **ku=berma* *ké' ina' ku* [*tepóng=nan pina'*]
 1SG.LOW.AFFIX=accompany with mother 1SG.LOW.AFFIX cake=that make
aku
 1SG.LOW
 (期待される意味)「私は母親と一緒にそのお菓子を作る。」

(120)は *berma* が従属文に現れている例である。主文の主要部は他動詞 *pina'*で、「共通の要素」はそれに合う形、つまり前置詞句補語の形で現れている。

- (120) *pina' tepóng=nan* [*berma ké' ina'*] *léng si=Siti.*
 make cake=that accompany with person=Japan by TITLE=Siti
 「シティは母親と一緒にそのお菓子を作る。」

この場合も述部内に現れる人称を表す要素は主文の述部に現れる。

- (121) *ku=pina'* *tepóng=nan* [*berma ké' ina' ku*]
 1SG.LOW.AFFIX=make cake=that accompany with mother 1SG.LOW.AFFIX

léng aku
 by 1SG.LOW
 「私は母親と一緒にそのお菓子を作る。」

(A)-(D)の場合と同様、従属文中では述部が先行し、補語は述部に後続する。(120)に対応する文として、従属文中で補語が述部に先行している(122)のような文は容認されない。

- (122) **pina' tepóng=nan* [*ké' ina' berma*] *léng si=Siti.*
 make cake=that with mother accompany by TITLE=Siti
 (期待される意味)「シティは母親と一緒にそのお菓子を作る。」

ただし、これまで扱ってきた従属文と異なり、*berma* を述部の主要部とする従属文は主文

の後だけでなく、前にも現れうる。(121)に対応する文として(123)のような文も容認される。

- (123) [berma ké' ina' ku] ku=pina' tepóng=nan
 accompany with mother 1SG.LOW.AFFIX 1SG.LOW.AFFIX=make cake=that
 léng aku
 by 1SG.LOW

「私は母親と一緒にそのお菓子を作る。」

次に *kènanang'* 「使う」の例を示す。

(124)は *kènanang'* 「使う」が主文に現れている例である。従属文の主要部は自動詞であるが、「共通の要素」は主文の主要部である他動詞 *kènanang'* 「使う」に合う形、つまり前置詞句補語の形で現れている。また、共通の要素に相当する人称辞は主文の *kènanang'* 「使う」に現れている。

- (124) *ku=kènanang'* pamongka=ta [mongka'] léng aku.
 1SG.LOW.AFFIX=use cooker=this cook.rice by 1SG.LOW

「私はこのお釜を使ってご飯を炊く。」

一般の従属文と同様、この場合も従属文は主文の述部の前には現れない。(118)に対応する例として(125)は容認されない。

- (125) *[mongka'] *ku=kènanang'* pamongka=ta léng aku.
 cook.rice 1SG.LOW.AFFIX=use cooker=this by 1SG.LOW

(期待される意味)「私はこのお釜を使ってご飯を炊く。」

また、主文の述部に後続する場合、主文の目的語の前に現れることはない。(124)に対応する文として(126)のような文は容認されない。

- (126) **ku=kènanang'* [mongka'] pamongka=ta léng aku.
 1SG.LOW.AFFIX=use cook.rice cooker=this by 1SG.LOW

(期待される意味)「私はこのお釜を使ってご飯を炊く。」

主文の主語と従属文の語順には制約がない。(124)に対応する文として(127)のような文も容認される。

- (127) *ku=kènanang'* pamongka=ta léng aku [mongka'].
 1SG.LOW.AFFIX=use cooker=this by 1SG.LOW cook.rice

「私はこのお釜を使ってご飯を炊く。」

(128)は *kènanang'* 「使う」が従属文に現れている例である。主文の主要部は自動詞で、「共

「通の要素」はその自動詞に合う形、つまり名詞句補語の形で現れている。この場合、人称辞は主文の動詞 *mongka* '「ご飯を炊く」に現れている。

- (128) *ku=mongka'* [*kènanang'* *pamongka=ta*] *aku*.
 1SG.LOW.AFFIX=cook.rice use cooker=this 1SG.LOW
 「私はこのお釜を使ってご飯を炊く。」

一般的な従属文の場合と同様、この場合も従属文中では述部が先行し、目的語は述部に後続する。(128)に対応する文として、従属文中で目的語が述部に先行している(129)のような文は容認されない。

- (129) **ku=mongka'* [*pamongka=ta* *kènanang'*] *aku*.
 1SG.LOW.AFFIX=cook.rice cooker=this use 1SG.LOW
 (期待される意味)「私はこのお釜を使ってご飯を炊く。」

ただし、*berma* 「一緒に～する」の場合と同様、*kènanang'* 「使う」を述部の主要部とする従属文は主文の後だけでなく前にも現れうる。(128)に対応する例として、(130)のような例も容認される。

- (130) [*kènanang'* *pamongka=ta*] *ku=mongka'* *aku*.
 use cooker=this 1SG.LOW.AFFIX=cook.rice 1SG.LOW
 「私はこのお釜を使ってご飯を炊く。」

(128)(130)に見られる特徴から、*berma* 「一緒に～する」を述部の主要部とする従属文と *kènanang'* 「使う」を述部の主要部とする従属文は、全体で副詞成分として機能していると考えられる。この特徴は、[A]-[D]で扱ってきた従属文にはみられない特徴である。

5.1 のまとめ

ここでは、主文の主語と従属文の主語が同一指示である場合に現れる構文を扱った。ここで扱った構文には以下のものがある。

- [A] 主文の述部が移動や感情を表す場合
- [B] 主文の述部が感情を表す場合
- [C] 主文の述部が様態を表す場合
- [D] 主文の述部の主要部が *bau* '「～できる」である場合
- [E] 主文またはの述部の主要部が *berma* 「一緒に～する」、動詞 *kènanang'* 「使う」である場合

この種の構文は、主文の表す状況と従属文の表す状況が「同時に」成立する場合に用いられるといえるだろう。

(A)の主文の述部が移動を表す場合、従属文は常に移動の手段を表し、主文の表す状況と

従属文の表す状況は同時に成立しているといえる。また、(B)の主文の述部が感情を表す構文、(C)の主文の述部が様態を表す構文は主文の表す状況と従属文の表す状況が同時に成立しているときにのみ用いられる。また、(D)の動詞 *bau'* 「～できる」、(E)の動詞 *berma* 「一緒に～する」、*kènanang'* 「使う」は意味的に付帯状況を表す動詞であり、動詞が現れる状況においては常に二つの状況が同時に成立している。

5.2 主文の目的語と従属文の主語または目的語が同一指示である場合

この種の構文は、主文の述部の主要部が *gita'* 「見る」または *ingo'* 「見る」で、従属文が知覚の対象となる状況を表す場合に観察される。

主文の述部の主要部が *gita'* 「見る」または *ingo'* 「見る」である場合、知覚される状況全体を表す従属文が目的語相当の機能を持つ構文と、知覚される状況の動作主または動作の対象のみが主文の目的語として現れる構文がある。前者の構文は 4.2 で扱った。(131)(132)はそこで扱った構文の例である。いずれの場合も、従属文は全体で主文の目的語として機能している。

- (131) *gita' léng nya=Amén [si=Siti berari']*.
 see by TITLE=Amén TITLE=Siti run
 「アミンはシティが走るのを見る。」

- (132) *gita' [si=Siti berari'] léng nya=Amén*.
 see TITLE=Siti run by TITLE=Amén
 「アミンはシティが走るのを見る。」

以下の部分では後者の構文、つまり、従属文の主語または目的語が主文の目的語として扱われる構文を扱う。以下に *gita'* 「見る」がこの構文に現れる例を挙げる。

最初に従属文の述部の主要部が自動詞である場合の例を挙げる。この場合、主文の目的語と従属文の主語が同一指示である。

- (133) *gita' si=Siti léng nya=Amén [berari']*.
 see TITLE=Siti by TITLE=Amén run
 「アミンはシティが走るのを見る。」

- (134) *si=Siti gita' léng=nya=Amén [berari']*.
 TITLE=Siti see by=TITLE=Amén run
 「アミンはシティが走るのを見る。」

同一指示の要素 *si=Siti* は(133)(134)にみられるように、従属文の述部から切り離された形で現れうる。また、(133)のように主文の述部に後続する場合も、(134)のように主文の述部

に先行する場合も名詞句補語の形で現れる。これは単文における目的語と共通する特徴であり、このことから、この要素は従属文に属するのではなく、主文の目的語として機能しているといえる。

また、「見る主体」を表す要素は上の(133)(134)のように述部に後続する場合は前置詞句補語の形で、下の(135)のように述部に先行する場合は名詞句補語の形で現れている。これは単文の主語と共通する特徴であり、このことから、見る主体を表す要素は主文の主語として現れているといえる。

- (135) *nya=Amén gita' si=Siti [berari']*.
 TITLE=Amén see TITLE=Siti run
 「アミンはシティが走るのを見る。」

次に従属文の述部の主要部が他動詞である例を示す。

(136)-(137)は従属文の述部の主要部が他動詞 *kakan'* 「食べる」である例である。いずれの文も、「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る」という内容を表し、意味的には従属文の内容全体が主文の表す状況の動作の対象に相当する。また、主文の表す状況の動作の対象と従属文の表す状況の動作主が、あるいは、主文の表す状況の動作の対象と従属文の表す状況の動作主および動作の対象が同一であるということもできる。

この場合、従属文の主語が主文の目的語として扱われる場合と、従属文の目的語が主文の目的語として扱われる場合の両方がある。

まず、従属文の主語に相当する要素が主文の目的語として扱われている場合の例を(136)(137)に挙げる。従属文の表す状況の動作主を表す要素 *si=Siti* 「シティ」は(136)のように述部に後続する場合も(137)のように述部の前に現れる場合もあり、いずれの場合も名詞句補語の形で現れる。これは、単文の目的語と同様の特徴であり、このことから、見られる対象を表す要素は主文の目的語として現れているといえる。

- (136) *gita' si=Siti léng nya=Amén [kakan' tepóng=nan]*.
 see TITLE=Siti by TITLE=Amén eat cake=that
 「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

- (137) *si=Siti gita' léng nya=Amén [kakan' tepóng=nan]*.
 TITLE=Siti see by TITLE=Amén eat cake=that
 「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

次に、従属文の目的語に相当する要素が主文の目的語として扱われている例を(138)(139)に挙げる。従属文の表す動作の対象である *tepóng=nan* 「そのお菓子」は(138)のように述部に後続する場合も(139)のように述部の前に現れる場合もある。いずれの場合も名詞句補語

の形で現れており、主文の目的語として扱われているといえる。

- (138) *gita' tepóng=nan léng nya=Amén [kakan' léng si=Siti].*
 see cake=that by TITLE=Amén eat by TITLE=Siti.
 「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

- (139) *tepóng=nan gita' léng nya=Amén [kakan' léng si=Siti].*
 cake=that see by TITLE=Amén eat by TITLE=Siti.
 「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

この場合も従属文は、他の従属文と同様、主文の述部に先行しない。

(133)に対応する(140)のような文、(136)に対応する(141)のような文、(138)に対応する(142)のような文はいずれも容認されない。

- (140) **[berari'] gita' si=Siti léng nya=Amén.*
 run see TITLE=Siti by TITLE=Amén
 (期待される意味)「アミンはシティが走るのを見る。」

- (141) **[kakan' tepóng=nan] gita' si=Siti léng nya=Amén.*
 eat cake=that see TITLE=Siti by TITLE=Amén
 (期待される意味)「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

- (142) **[kakan' léng si=Siti] gita' tepóng=nan léng nya=Amén.*
 eat by TITLE=Siti see cake=that by TITLE=Amén
 (期待される意味)「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

一方、主文の主語と従属文の間には語順の制約はない。(134)に対して、(143)のような文が容認される。

- (143) *si=Siti gita' [berari'] léng nya=Amén.*
 TITLE=Siti see run by TITLE=Amén
 「アミンはシティが走るのを見る。」

また、(137)に対して(144)のような文も容認される。

- (144) *si=Siti gita' [kakan' tepóng=nan] léng nya=Amén.*
 TITLE=Siti see eat cake=that by TITLE=Amin
 「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

また、前項 5.1 で扱った従属文の場合と同様、従属文内においては、常に述部が補語(主語、目的語)に先行する。(136)に対して、従属文内で目的語が述部に先行している(145)の

ような文は容認されない。

- (145) *gita' si=Siti léng nya=Amén [tepóng=nan kakan']*.
 see TITLE=Siti by TITLE=Amén cake=that eat
 (期待される意味)「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

また、(138)に対して、従属文内で動作主を表す語が述部に先行している(146)のような文は容認されない。

- (146) *gita' tepóng=nan léng nya=Amén [si=Siti kakan']*.
 see cake=that by TITLE=Amén eat TITLE=Siti.
 (期待される意味)「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

gita' 「見る」が第 4 節で扱った構文に現れる場合との比較

この項の最初で述べたように、動詞 *gita'* 「見る」、*ingo'* 「見る」は、4.2 で扱った、従属文全体を目的語として扱う構文に現れることもある。そのため、ある文がどちらの構文を取っていると解釈するかによって、意味のあいまいさが生じることがある。

ここでは動詞 *gita'* 「見る」の例を挙げる。

たとえば、次の例文(147)では、名詞句 *si=Siti* を主文の目的語であると分析することもできる[分析 1]、述部 1 に文全体を主文の目的語であると分析することもできる[分析 2]。

- (147) *nya=Amén gita' si=Siti kakan' tepóng=nan.*
 TITLE=Amén see TITLE=Siti eat cake=that
 [分析 1] [主文の目的語] [従属文]
 [分析 2] [従属文(全体で主文の目的語として機能)]
 「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」

このような二種類の解釈が生じるため、次のような場合、文の意味のあいまいさが生じる。(148)は文頭の名詞句を *gita'* の目的語と分析するか、述部に後続する文全体を目的語と分析するかによって二通りの意味を持つ。

- (148) *nya=Amén gita' kakan' tepóng=nan léng si=Siti.*
 TITLE=Amén see eat cake=that by TITLE=Siti
 [分析 1] 主文の目的語 主文の述部 [従属文] [主文の主語]
 [分析 2] 主文の主語 主文の述部 [従属文(全体で主文の目的語)]]
 1 「シティはアミンがそのお菓子を食べるのを見る。」 [分析 1]
 2 「アミンはシティがそのお菓子を食べるのを見る。」 [分析 2]

5.3 主文の動作の受け手を表す要素と従属文の主語が同一指示である場合

8.5 従属文 2 (完全な文としては現れないもの)

主文の述部の主要部が命令、依頼などを表す他動詞（たとえば、動詞 *suru'* 「命令する」や *bèang'* 「～することを許す」など）である場合、従属文が命令、依頼の内容を表し、全体で「～するように言う」「～するように頼む」などの内容を表す。この場合、主文の動作の受け手（命令や許可の受け手）が従属文の動作主に意味的に対応する。

動詞 *suru'* 「命令する」の例を挙げる。まず、従属文の述部の主要部が自動詞である例を挙げる。第 5 章 6.8 で述べたように、命令や依頼の受け手を表す要素は上の(149)(150)のように主文の述部内（動詞の直後の位置）に現れることもあれば、下の(151)(152)のように前置詞句補語の形（前置詞 *kó'* の句）で現れることもある。

(149) *suru' nya [berari'] léng nya=Amén.*
 order 3 run by TITLE=Amén
 「アミンは彼に走るように命令した。」

(150) *suru' ku [berari'] léng nya=Amén.*
 order 1SG.LOW.AFFIX run by TITLE=Amén
 「アミンはわたしに走るように命令した。」

(151) *suru' léng nya=Amén [berari'] kó' nya.*
 order by TITLE=Amén run to 3
 「アミンは彼に走るように命令した。」

(152) *nya=Amén suru' [berari'] kó' aku.*
 TITLE=Amén order run to 1SG.LOW
 「アミンはわたしに走るように命令した。」

上で述べたように、この場合、主文において動作の受け手を表す要素と、従属文において動作主を表す要素は同一指示だが、この要素は常に主文の構成要素として現れ、従属文内の要素としては現れない。

(149)に対応する文として、従属文中に主語が現れている(153)のような例は容認されない。

(153) **suru' nya léng nya=Amén [nya berari'].*
 order 3 by TITLE=Amén [3 run]
 (期待される意味)「アミンは彼に走るように命令した。」

また、従属文の述部に動作主に相当する人称辞が現れている文も容認されない。(150)に対応する例として、(154)のような例は容認されない。

8.5 従属文2 (完全な文としては現れないもの)

- (154) **suru' ku* [ku=berari'] *léng nya=Amén.*
 order 1SG.LOW.AFFIX 1SG.LOW.AFFIX=run by TITLE=Amén
 (期待される意味)「アミンはわたしに走るように命令した。」

次に従属文の述部の主要部が他動詞である例を挙げる。従属文の主要部が自動詞である場合と同様、命令の受け手を表す要素は(155)(156)のように主文の述部内に現れる場合と(157)(158)のように主文の前置詞句補語(前置詞 *kó'*の句)として現れる場合がある。

- (155) *suru' nya* *léng nya=Amén* [beli jangan=nan]
 order 3 by TITLE=Amén buy fish=that
 「アミンは彼に魚を買うように命令した。」

- (156) *suru' ku* *léng nya=Amén* [beli jangan=nan]
 order 1SG.LOW.AFFIX by TITLE=Amén buy fish=that
 「アミンは私に魚を買うように命令した。」

- (157) *suru' léng nya=Amén* [beli jangan=nan] *kó' nya.*
 order by TITLE=Amén buy fish=that to 3
 「アミンは私に魚を買うように命令した。」

- (158) *suru' léng nya=Amén* [beli jangan=nan] *kó' aku.*
 order by TITLE=Amén buy fish=that to 1SG.LOW
 「アミンは私に魚を買うように命令した。」

また、この場合も従属文の主語が従属文内に現れることはない。(155)に対して、従属文中に主語が現れている(159)は容認されない。また、(156)に対して従属文中に人称辞が現れている(160)も容認されない。

- (159) **suru' nya léng=nya=Amén* [beli jangan=nan *léng nya*].
 order 3 by=TITLE=Amén buy fish=that by 3
 (期待される意味)「アミンは彼に魚を買うように命令した。」

- (160) **suru' ku* *léng=nya=Amén* [ku=beli jangan=nan].
 order 1SG.LOW.AFFIX by=TITLE=Amén 1SG.LOW.AFFIX=buy fish=that
 (期待される意味)「アミンは私に魚を買うように命令した。」

他の従属文の場合と同様、従属文内の語順は述部が先行し、目的語が後に現れる。(155)(156)に対応する例として、(161)(162)のように目的語が先行している例は容認されない。

8.5 従属文 2 (完全な文としては現れないもの)

(161) **suru' nya léng=nya=Amén [jangan=nan beli].*
 order 3 by=TITLE=Amén fish=that buy
 (期待される意味)「アミンは彼に魚を買うように命令した。」

(162) **suru' ku léng=nya=Amén [jangan=nan beli].*
 order 1SG.LOW.AFFIX by=TITLE=Amén fish=that buy
 (期待される意味)「アミンは私に魚を買うように命令した。」

この種の従属文一般に言えることとして、他の従属文の場合と同様、従属文の位置は主文の後に限られる。(149)に対応する文として(163)、(156)に対応する文として(164)は容認されない。

(163) **[berari'] suru' nya léng nya=Amén.*
 run TITLE=Amén order 3 TITLE=Amin
 (期待される意味)「アミンは彼に走るように命令した。」

(164) **[beli jangan=nan] suru' ku léng=nya=Amén.*
 buy fish=that order 1SG.LOW.AFFIX by=TITLE=Amin
 (期待される意味)「アミンは私に魚を買うように命令した。」

従属文と主文の主語との相対的語順には制約がない。(149)に対応する文として(165)のような文、(150)に対応する文として(166)のような文も容認される。

(165) *suru' nya [berari'] léng nya=Amén.*
 order 3 run by TITLE=Amén
 「アミンは彼に走るように命令した。」

(166) *suru' ku [beli jangan=nan] léng nya=Amén.*
 order 1SG.LOW.AFFIX buy fish=that by TITLE=Amén
 「アミンは私に魚を買うように命令した。」

5.4 第5節のまとめ

5.1-5.3 で扱ってきた従属文には以下の特徴がある。

- (i) 主文の主語、目的語、または、動作の受け手を表す要素と従属文の主語または目的語が同一指示で、その要素が従属文中には現れない。(述部内の人称をあらわす要素としても現れない。)
- (ii) 従属文内の語順には、常に述部が先行し、補語がその後に見えるという制約がある。
- (iii) 従属文は主文の述部の前には現れない。(これは、4 で扱った従属文と共通の性質である。)

8.5 従属文 2 (完全な文としては現れないもの)

(iv) この節の最初で述べたように、この種の構文と主文の述部が単文に現れた場合の構文を対比した場合、この種の構文の従属文は対応する単文中の成分を持たない。

このうち(i)(ii)の特徴は、5.8.1で扱った名詞形成詞 *adè* に後続する文と共通の特徴である。このことから、この言語では述部と補語のこの順での組み合わせが特定の条件で何らかの単位を形成していると認めることができるだろう。

6 従属文 3 (接続詞を伴うもの)

ここでは、接続詞を伴う従属文を扱う。

以下の部分では、接続詞をその表す内容によって以下のように分類し、例を挙げる。

- [1] 理由(確定条件)を表す接続詞: *léng*, *apa*
- [2] 仮定条件を表す接続詞: *lamén*
- [3] 目的を表す接続詞: *bau'*
- [4] 逆接を表す接続詞: *kelé'*
- [5] 時間的前後関係を表す接続詞: *senópoka'* (~の前に), *sesuda'* (~の後に), *setela* (~の後に), *beru'* (~の直後に), *muntu* (~のときに(同時))

接続詞のうち理由を表す *apa* の文、目的を表す *bau'* の文は常にもう一方の文に後続する。また、仮定条件を表す *lamén* の文は条件によっては、もう一方の文に後続する。その他の場合、接続詞を含む文ともう一方の文の配列順には特に制約がない。

- [1] 理由(確定条件)を表す接続詞: *léng* 「 ~なので」, *apa* 「 というのも」

léng は、他動詞の動作主を表す前置詞と同形、*apa* は、疑問名詞「何」と同形である。

(167)は *léng* に導かれる従属文の例である。

- (167) *léng nó mo bau' tahan laló mo Si=Ijo=ta.*
Because NEG disc can stand go MM Mis=Ijo=this
「もう我慢ができなかったので、Ijo は出て行った。」

(168)は *apa* に導かれる従属文の例である。接続詞 *apa* を含む従属文は、日本語の話し言葉の「だって...」と似たニュアンスを持ち、や常に主節に後続する。

- (168) *ada' pitu' pégó, apa pitu' tau.*
exist seven pot because seven person
「七つの壺があった。というのも、七人の人がいたから。」 [LK022]

- [2] 仮定条件を表す接続詞: *lamén* 「もし ~」

接続詞 *lamén* は仮定条件を表す。(169)に例を示す。

8.6 従属文 3 (接続詞を伴うもの)

- (169) *lamén saté' mu=tutét ku, mu=datang mo.*
 If like 2SG.LOW.AFFIX=follow 1SG.LOW.AFFIX 2SG.LOW.AFFIX=come MM
 「もしあなたが私について来たければ、来なさい。」 [LK134]

lamén を含む文が表す仮定の主体、そして、その文が表す状況が実現しているかどうか不確かである主体は通常は話し手である。たとえば、(170)では、「聞き手が私について来たがっている」という仮定を設定しているのは話し手であり、「聞き手が私について来たいかどうか」について不確かであるのも話し手である。

ただし、*lamén* を含む文が、感情を表す動詞のうち *ketakit* 「こわがる」、*kasusa'* 「心配する」などと共起する際には、特殊な解釈が生じ、仮定の主体が主文の動作主として解釈されることがある。以下に例文を示す。

- (170) *ketakét nya lamén soai' nya kènanang' peno' pipés.*
 afraid 3 if wife 3 use many money
 1 「妻がたくさんお金を使えば彼は怖いだろう。」
 2 「彼は妻がたくさんお金をつかったのではないかと恐れている。」

- (171) *kasusa' nya lamén anak nya kènanang' peno' pipés.*
 worry 3 if child 3 use much money
 1 「息子がたくさんお金を使えば彼は心配だろう。」
 2 「息子がたくさんお金を使ったのではないかと心配している。」

訳文に示したように、(170)(171)では、仮定の主体を話し手であるとする解釈と仮定の主体を先行する文の表す状況の主体（つまり、こわがったり心配したりしている人）であるとする解釈の両方が可能である。前者の解釈を取ると、日本語訳 1 の意味が生じ、後者の解釈を取れば日本語訳 2 の意味が生じる。

後者の解釈は、(170)(171)のように接続詞 *lamén* を含む文がもう一方の文に後続する場合にのみ生じる。(170)'(171)'のように接続詞 *lamén* を含む文がもう一方の文に先行している場合には、そのような解釈は生じない。

- (170)' *lamén soai' nya kènanang' peno' pipés, ketakét nya.*
 if wife 3 use many money afraid 3
 「妻がたくさんお金を使えば彼は怖いだろう。」
 (「彼は妻がたくさんお金をつかったのではないかと恐れている。」という解釈は生じない。)
 (171)' *lamén anak nya kènanang' peno' pipés kasusa' nya.*
 if child 3 use much money worry 3
 「息子がたくさんお金を使えば彼は心配だろう。」

(「息子がたくさんお金を使ったのではないかと心配している。」という解釈は生じない。)

(170)(171)の解釈1と解釈2の間にみられる「仮定の主体」に関する解釈の違いは、*lamén*の文と共起する文の意味の解釈にも関係する。*lamén*が話者の仮定を表す場合は、それと共起する文(帰結を表す文)の表す状況に関してもその成立は不確かであることが示される。(170)(171)の解釈1においては、仮定の部分「妻がたくさんお金を使ったこと」「息子がたくさんお金を使ったこと」の成立、およびその帰着の部分「彼が怖がっていること」「彼が心配していること」との両方の成立が不確かであると解釈される。

それに対して解釈2においては、仮定の部分の内容の成立は不確かだが、先行する文の表す内容(怖がったり心配しているという事実)は成立しているものと解釈される。

このようないわゆる「ムード」の設定の主体が話者ではなく、先行する文の動作主であると解釈される例は、この*lamén*節の他に、以下の[3]で扱う目的を表す複文においても見られる。

[3] 目的を表す接続詞：*bau'*

*bau'*の文には、モダル辞 *ma* (願望)または *na* (否定の願望)が現れる。*ma*が現れる場合は、述部の表す状況が実現することが目的であること(～するように)が表され、*na*が現れる場合は、述部の表す状況が実現しないことが目的であること(～しないように)が表される。

(172) *ada' rasa iri ina=ta ké' adi=ta.*
 Exist feel jeros mother=this with younger.sibling=this
saté ya=racén si=ljo=ta, bau' ma=dapat selaki'.
 want CONS=potion TITLE=ljo=this can DESIRE=get husband

「母親と妹は嫉妬心を抱き、イジョの夫を手に入れることができるように、イジョに毒を盛りたがったのである。」

(173) *tódé=Siti=ta berari' mo, ya=bèang' mo*
 child=Siti=this run MM CONS=throw MM
gunténg=ta kó' dalam brang.
 scissor=this to inside river
bau' na to' léng tau
 can DESIRE.NEG know by person
sai baèng' ka=samaté ina'.
 who responsible PERF=kill mother

8.6 従属文3 (接続詞を伴うもの)

「シティは、逃げて行き、誰が母親を殺したのか人に知られないように、川に、そのはさみを捨てた。」 [KB035]

*bau'*の文は常にもう一方の文に後続する。(173)に対応する(173)'のような文は容認されない。

- (173)' **ada'* *rasa iri ina=ta ké' adi=ta.*
 exist feel jerous mother=this with younger.sibling=this
bau' *ma=dapat selaki, saté ya=racén si=Ijo=ta,*
 so.that DESIRE=get husband want CONS=poison TITLE=Ijo=this
 (期待される意味) 「母親と妹は嫉妬心を抱き、イジョの夫を手に入れることができるように、イジョに毒を盛りたがったのである。」

ma 「願望」、*na* 「否定の願望」は、単文ではいずれも話者の願望を表す。

- (174) *ma=mu=tedu pang' ta.*
 DESIRE=2SG.LOW.AFFIX=stay at this
 「ここにとどまってはどうか。」

- (175) *na datang kóta.*
 DESIRE.NEG come to.here 「こちらに来ないでください。」

一方、上記のような「目的」を表す例においては、*ma* 「願望」、*na* 「否定の願望」は、いずれも当該の文の表す内容が実現することに対する動作主の願望を表している。

ma 「願望」、*na* 「否定の願望」を含む文はいずれも非実現の状況を表す。このように非実現を表す文において、ムードに関する内容の設定主体が「主文」の動作主である例は、[2]で扱った *lamén* 「仮定条件」を含む文にも見られる。この種の文は常に重文中のもう一方の文に後続するという共通点を持っている。

[4] 「逆接」を表す接続詞:*kelé'* 「～といえども」、*sedang* 「～であるのに」

(176)は *kelé'* 「～といえども」の例である。

- (176) *béló' gama umér tu, Edot, kele' ta lók-lók*
 long plase year 1PL.AFFIX Edot although this way

rabuya bibi mu=ta é.. nanta.
 live aunt 2SG.LOW.AFFIX=this you.know oh

「私たちが長生きできるといいねえ、エドット、おばさんたち(自分の二人の娘)の生活がこんなふうだとはいえ。ああ。」 [PA125]

8.6 従属文 3 (接続詞を伴うもの)

(177)は *sedang* 「 ~であったのに 」 の例である。

(177) *dadi lalu=Sangkilang=ta nongka samaté' walaupun ka=nyongong*
 then TITLE=Sangkilang=this NEG.PERF kill although PERF=look.up
sedang lamén tau=lén=nan nyongong mesti samaté'
 although if people=other=that look.up surely kill
léng' datu=Basangè-Jaran=ta.
 by headman=Basangè-Jaran=this

「そうして、ラル・サンキランは、上を向いたのに---他の人が上を向いたら必ず馬面王に殺されたというのに---殺されることはなかった。」 [History 058]

[5] 時間的前後関係を表す接続詞 :*senópoka'* 「 ~の前に 」 , *sesuda'* 「 ~の後に 」 , *setela* 「 ~の後に 」 , *muntu* 「 ~のときに(同時) 」 , *beru'* 「 ~の直後に 」
 それぞれの例を挙げる。

(178) *senópoka'* *ku=mangan* *ku=manéng'*
 before 1SG.LOW.AFFIX=have a meal 1SG.LOW=have a shower
 「私は食事をする前にシャワーを浴びた。」

(179) *sesuda'* *ku=mangan,* *ku=manéng'*
 after 1SG.LOW.AFFIX=have a meal 1SG.LOW.AFFIX=have a shower
 「私は食事をした後で、水浴びをした。」

(180) *setela ka mo ngibar adè enam, batada kan dèta.*
 after PERF MM fly NOM six remain INTERR this
 「六人が飛んで行ったあと、これ(この娘)は取り残された。」 [LK 053]

(181) *muntu ku=mopo, datang nya.*
 time 1SG.LOW.AFFIX=laundre come 3
 「私が洗濯をしているときに、彼が現れた。」

(182) *beru'* *ka=m=tu=kukés* *né,*
 just.after PERF=MM=1PL.AFFIX=steam you know

ba=t=tédéng sugan, na.
 interj=1PL.AFFIX=put on a stove pan you see

8.6 従属文3 (接続詞を伴うもの)

「(米を水につける。それから、米を蒸す。) 米を蒸したらすぐ、フライパンを火にかける。」 [wajik008]

muntu 「～のときに」と *beru'* 「～の直後に」の二つは、単文では、アスペクトを表す副詞として用いられる。(副詞については第5章7で述べた。)

muntu は単文では、発話時点において継続中の動作(「～しているところである」)を表す。

(183) *muntu* *nya* *mangan*.
PROGRESSIVE 3 eat 「彼は今食事中である。」

beru' は単文では、発話の直前に起こった動作(「～したばかりである」)を表す。

(184) *beru'* *nya* *datang* *kóta*.
just 3 come here 「彼はここに来たばかりである。」

この二つの要素の副詞としての機能と接続詞としての機能を一般化すると、*muntu* も *beru'* もある基準点との時間的位置関係を表しているといえるだろう。*muntu*, *beru'* が単文に現れる場合は、発話時点を基準点として、その時点との位置関係が示され、複文に現れる場合は、もう一方の文の状況の成立時点を基準点として、その時点との位置関係が示されるということになる。

基準点からの時間的位置関係を示すという点では、第6章1.1で扱ったアスペクト辞 *ka* (完了)も同様の機能を持つ。*ka* (完了)は通常は発話時点を基準としてそれ以前に完了した状況を表すが、複文に現れる場合はもう一方の文の状況を基準点として、その時点より前に完了した状況を表す。

接続詞のうち従属文を形成しないもの

これまでこの項では、接続詞を含む従属文を扱ってきた。一方、接続詞の中には、特定の文との意味的關係ではなく、先行する一連の発話によって表されている状況や、言外の状況との意味的關係を示すものもある。そのような接続詞には、*karéng*「そして」、*dadi*「そして」、*tapi*「しかし」がある。以下に例を示す。

・逆接を示す接続詞：*tapi*「しかし」

*tapi*は日本語の「しかし」に似た内容を表す接続詞で、当該の文が、先行する部分が表す状況から予測されることに反している状況を表す場合に用いられる。(185)は物語からの引用である。

(185)

- (a) *lalu=nya, nya=anong=ta nya é, lala=ta bidadari supu=ta*
 nobleman=3 TITLE=that=this 3 you.know lady=this fairy the youngest=this
mongka' mo lala=ta mongka'.
 cook.rice MM noblelady=this cook.rice

「彼女は、あの、彼女、姫はね、末の天女はご飯を炊いていた。姫はご飯を炊いていた。」

[LK077]

- (b) *mongka' nya=nan ètè' gaba sópó' baè si, setama' dalam*
 cook.rice 3=that take unhulled.rice one only MM put.in inside
kó' pamongka'.
 to rice.cooker

「彼女のご飯の炊き方は、籾付きの米を一粒だけ取って、お釜の中に入れる。」 [LK078]

- (c) *tutóp, óló' ai', bakela' dadi lémpó kó' mongka=ta.*
 close put water boil then full to rice.cooker=this

「水を入れて蓋をする。沸騰したら、(お米が)お釜に一杯になる。」 [LK079]

- (d) *tapi prosès dadi mè né rena-sedi, kebokèk*
but process become rice you.know little.by.little peel
ba' ta ada' las misal kebokèk kebokèk kebokèk, sehingga
 so this exist unpolished.rice for.example peel peel peel as.a.result
lamén=turén pang' tenga' sebelóm masak né, kelihatan,
 if=go.down at center before cooked you.know it.seems
tu=gita' seola-ola' tawa dua lóto ké' las.
 1PL.AFFIX=look in.the.same.way share two rice and unpolished.rice

8.6 従属文3 (接続詞を伴うもの)

「しかし、ご飯になるプロセスは、(最初の一粒がすぐにたくさんに増えるのではなく、
 粘つきのお米の一粒一粒が) 少しずつ皮が剥けて (お米になる。) だから、例えば、こう
 粘つきのお米があったとしたら、皮がむけて、むけて、むけて.....炊ける前の途中で降り
 たら (やめたら)、(釜の内容物の) 見た目は、お米と粘付きのお米の半々である。」[LK080]

(e) *dadi turén nya laló=maning', mólé' mo mentua=ta, gita' mo*
 then go.down 3 go=bathe go.home MM parent.in.law=this look MM

ada' pamongka' pang' bao api, bao dapór, ulèng mo pamongka=ta
 exist rice.cooker at on fire on fire.place open MM rice.cooker=this

「そして、彼女は水浴びをしに降りていった。姑が帰ってきて、火の上に、かまどの上にお
 釜があるのを見て、お釜のふたを開けてみた。」[LK081]

(d)の*tapi*「しかし」は、直前の文の内容(お米がお釜にいっぱいになること)だけでなく、
 先行する(b)(c)に含まれる複数の文の表す状況全体 (お米を一粒入れ、蓋をして炊くとお米
 がお釜に一杯になること) を受けて、その文(d)の表す状況がそこから通常予測されること
 とは反していることを示している。

・結果を表す接続詞 : *dadi* 「そして」、*karéng* 「そして」

dadi 「そして」は当該の文が、先行する部分が表す状況の結果を表す場合に用いられる。
 上の(185)(e)の *dadi* 「そして」を含む文は、直前の文の内容ではなく、それに先行する(a)-(c)
 の内容の結果を示しているといえる。

karéng 「そして」も同様の意味を表す。(180)に例を示す。(186)は物語「クレクレの話」
 からの引用である。(a)が天女の台詞、(b)-(d)がそれに答える天女のしもべの台詞である。

(d)の *karéng* 「そして」の文の表す内容は、直前の文(c)の内容だけではなく、先行する複
 数の文(a)-(c)の内容の結果であると考えられる。

(186)

(a) *sai ada' pang' buén né ita né*
 who exist at well you.know a.little.while.ago you.know

pang' sama ètè' ai=ana né.
 place same take water=over.there you.know

「さっきの泉には、みんなで水を汲みに行っていた場所には誰がいたの？」[LK170]

(b) *wo ada' tau selaki, léng, ada' tau=selaki léng.*
 oh exist man male word exist man=male word

「ああ、男の人がいました、男の人がいました。[LK171]

8.6 従属文 3 (接続詞を伴うもの)

(c) *engka ku=bau' sentèk periók ku léng.*
 NEG.PERF 1SG.LOW.AFFIX=can put.onto bucket 1SG.LOW.AFFIX word

私は桶を(頭の上に)持ち上げることができなかつたのです。 [LK172]

(d) *karéng k=ngènèng tulóng mo sentèk periók aku*
 and.then 1SG.LOW.AFFIX=ask.a.favor help MM put.onto bucket 1SG.LOW

léng nya=ta, nan.

by 3=this that

「それで、私は(その男の人に)お願いをして、彼が私の桶を持ち上げたんです。」 [LK173]